

集団間和解に対する人間性認知の効果の社会心理学的研究

Social psychological study of humanity cognition effect on intergroup reconciliation

熊谷 智博

Tomohiro Kumagai

大妻女子大学文学部

Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

キーワード : 集団間紛争, 和解, 人間性認知

Key words : Intergroup conflict, Reconciliation, Humanity cognition

1. 研究目的

本研究は紛争状態にある集団間関係において、外集団の人間性認知が和解を促進する心理過程を解明し、実社会での応用可能性を検討することを目的としている。集団間の紛争は現代社会が抱える深刻な問題の一つであるが、社会心理学は初期よりこの問題を検討してきた。その中でも一定の成果を上げているのが集団接触に関する研究である (Allport, 1954)。これは紛争状態にある集団の成員同士に接触する機会を設けることで、相手集団に対するネガティブなイメージを払拭し、良好な関係を形成しようとする試みである。これまでの研究では接触場面で必要となる諸条件が数多く検討されてきた。更に集団接触の形態についても間接的な接触の効果を検討した拡張接触 (Wright, Aron, McLaughlin-Volpe & Ropp, 1997) や想像接触 (Crisp & Turner, 2009) に関する研究は一定の成果を上げている。一方、自集団のアイデンティティを変えることで、集団間紛争を低減させる試みもある。その代表は Gaertner & Dovidio (2000) の共通内集団アイデンティティモデルである。このモデルでは対立集団同士で共有可能な社会的アイデンティティを形成する事で外集団へのネガティブな態度を低減させる。それ以外にも交差カテゴリー化 (Crisp & Hewstone, 1999) や多重カテゴリー化 (Crisp, Hewstone & Rubin, 2001) においても対立集団と共有しているアイデンティティを顕現化させることによって外集団へのネガティブな態度を低減させることが報告されている。

これらのアプローチは理論的にも実践的にも一定の成果を上げており、集団成員が相手集団とその成員に対するネガティブな態度をポジティブなものへと変えるという点では一致している。しか

し相手集団に対するポジティブな認知に関しては、道徳性や温かな性格、多様性や有能さなど様々な点が挙げられているものの、より根本的な要因についてはあまり検討されていない。そこで本研究では、相手集団に対するポジティブな認知のうち「人間性」の認知に焦点を当て、それがポジティブな特性認知の中でどれくらい根本的な要因であるか、またそれが集団間の和解に与える影響や「有能さ」認知との効果の差、更にはより効果的な人間性認知の方法を解明する。

2. 研究内容及び成果

当初調査会社にインターネット調査を依頼する予定であったが、予算が申請より減額されたため対象者を学生へ変更して実施した。136名の日本人大学生を対象に、外集団 (今回の研究では中国人) の「有能さ」と「温かさ」の認知と集団間和解、特に歴史的加害行為及び政府としての補償と謝罪に対する支持的態度に関して質問紙調査によって回答を求めた。その結果、外集団に対するポジティブなイメージに関しては、「有能さ」よりも「温かさ」がより重要であることが明らかになった。特に「温かさ」は外集団に対する尊敬を媒介して、和解への支持的態度を強めるが、「有能さ」認知にはこのような効果が無いことが明らかになった。この事は本研究の目的である、人間性認知の中でも能力的な側面よりも信頼関係などの関係形成において重要となる温かさがより重要であるということを示唆している。更に他人との愛着回避や愛着不安傾向も集団間関係に影響を与える事が見出され、これらの結果から「安心感」が集団間和解にとって重要な潜在的な心理的要因となることを示唆しており、今後の理論的発展可能性を示す事ができた。

また当初より予定していた心理学シンポジウムを 12 月 19 日に開催することが出来た。シンポジウムでは攻撃性研究で著名なドイツの Marburg 大学の Gollwitzer 教授より復讐と和解の関係性についての研究について発表して貰ったが、その研究に対する議論を通じて、行為者が報復によって得る心理的利益に対して、外集団のイメージは特に重要であり、外集団に対して人間性を高く認知した場合は、復讐も抑制され、後の集団間関係も建設的になる心理過程について高いレベルでの議論をすることができた。また日本における攻撃性研究の第一人者である東北大学の大淵憲一教授には寛容性と和解の関係性についての研究についての講演をお願いしたが、寛容性の発揮しやすい前提条件として、外集団が高い人間性を備えているという認知が重要な要因であることが議論された。このようにシンポジウムでの講演者との議論は、本研究課題の理論的發展に極めて示唆に富む情報を提供していた。更に Gollwitzer 教授とのシンポジウムを通じての議論から、この心理的メカニズムが文化依存的か普遍的かを検討するために、ドイツでの共同研究を通じてデータを回収し、検討することとなった。加えてシンポジウムを一般市民へも公開したことで、大学の学術活動への一般的理解を広める事が出来たことも大きな成果と言える。

3. まとめと今後の課題

本研究の結果は、集団間の和解において外集団に対するポジティブなイメージが重要な役割を果たすという従来の知見に対して、単にポジティブなイメージなら何でも良いと言うわけではなく、「温かさ」に代表される人間性の高さが特に重要であることが明らかにしている。それに対して有

能さはあまり効果が無いことから、集団間和解のためのイメージ戦略は、人間性の高さを強調するように行う事が重要であるといえる。

今後の課題としては、なぜ「温かさ」は「有能さ」よりも効果が大きいのかという点を明らかにする必要があるだろう。予想される要因としては「温かさ」が与える安心感が考えられる。「温かい」人間は自分に対して裏切ったり、騙したりする事が無いという信頼感を与え、それが集団間関係の将来に対する安心感を与えると考えられる。この点については次年度、調査会社に一般市民を対象とした大規模なインターネット調査を利用することで詳細に検討する予定である。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

なし

②学会発表

[1] Tomohiro Kumagai *Intergroup Respect and Reconciliation*. "Globalized World: Advantage or Disadvantage", Institute of international politics and economics, Belgrade, September 7th 2015.

[2] Tomohiro Kumagai. *Cognitive and affective process in response to intergroup conflict*. In 23rd international congress of international association for cross-cultural psychology, Nagoya University and WING Aich, Nagoya Japan. 2016 (発表確定).

③図書

なし

(2016年3月31日現在)